聖書日課

みちのひかり

2023

8月

今月の聖句

「主、主、憐れみ深く、恵みに満ちた神。」
出エジプト記 第34章6節

八王子キリスト教会

8月1日（火）　出エジプト記　第10章

しかし、イスラエルの人々が住む所には光があった。（23）

　重ねてファラオの不信仰が語られます。本章で、ばったと暗闇の災いを経験しても心は変わらないばかりか、9 番目の暗闇の災いに対する反応は、モーセとアロンに対する殺意まで語るようになります。つまり、ここまで九つ重ねられてきた災いが作り出したものは、より強く頑なになる心でしかありませんでした。ひとすじの心で神を受けとめることを抜きにして、何をどう考えようとも、結局頑なになるしかない、と言えるでしょう。

　膠着状態と言えばそうですが、こうしたファラオの不信仰は、神のイスラエル救出計画にすでに織り込み済みで、イスラエルが神への疑いに染められる必要はないのです。世界中がどんなに不信仰に染まっても、それで神の存在が薄まるわけではありません。依然として、人間は神がお造りになった世界に生きています。人間が信じるから神が存在するのではありません。神がおられるからこそ、私たちが存在するのです。神を否定しきることができる者がいるとすれば、それはもう一人の神、神以上の神でなければなりません。日本でどんなに主を信じぬ人々に囲まれようとも、主はご自身の力を少しも弱らせることなく、生きておられるのです。イスラエルの光(23)とは、この信仰の光です。

　主よ、不信仰の誘惑の中で、光そのものを信じていることができますように。

8月2日（水）　出エジプト記　第11章

こうして、あなたがたは主がエジプト人とイスラエル人を区別されることを知るであろう。(7)

　ファラオがモーセらへの殺意を語ったとき、主との対決が一気に命の話になります。ファラオが見誤った点は、主がイスラエルの一民族の神であるばかりでなく、すべての命の根源者であることです。その命の根源者に対して、ファラオは敵対したのです。ファラオは、主の世話にならずとも、自分は自分の力と知恵で生きてゆける、という感覚でしょう。彼のこの決意は、実際には神を無にすることです。しかし、神の否定は自分の存在の基盤の否定です。親不孝以上の不幸ですし、魂の危機です。初子の死とイスラエルの守りは、神が畏るべき命の権威者であることを示しています。

　私たちが生きる世界の価値観も、何も神さまのお世話にならなくても、自分の力で命を豊かにできる、とういもので、このファラオの価値観と似ています。自分の存在も命も自由に作る力を獲得できると考えています。これは、魂の危機です。〈自分で自分を生かせる〉という考えを推し進めれば、他者はせいぜい〈自分のよりよい生のための有用な道具〉になります。それでは有用でない人間は無用な存在となってしまいます。

　主よ、お守りください。この世界に私も他の誰かも、大切においてくださった神を見失いませんように。自分やほかの誰かを無用だと思い込みませんように。

8月3日（木）　出エジプト記　第12章

この日は、あなたがたの記念となる。あなたがたはこれを主の祭りとして祝い、とこしえの掟として代々にわたって祝いなさい。（14）

　災いはエジプトにだけもたらされたものではなく災いはすべての人に及ぶべきもので、だからこそ「私はその血を見て、あなたがたのいる所を過ぎ越す」と言われています。家の入り口の柱と鴨居に塗られた小羊の血を「しるし」として、災いは過ぎ越します。それがなければ、たとえ血筋がイスラエルであっても、その災いに捕らえられてしまうということでもあります。初子は次世代の象徴ですから、初子が打たれることで示されるのはその社会が将来を失うことです。神を認めず、誰かの苦しみを踏み台として存在するような社会は将来を失います。

　イスラエルがそうならないために、主は記念と祝いを準備してくださいました。主の愛と憐れみを感謝し、神と他者を愛する律法を重んじて滅びから救われて生きることへと招きます。本書の後半では、神と他者を愛する律法も告げられますが、やがてイスラエルの主への信仰は弱まり、律法に逆らって弱い者たちを虐げ、とうとう滅びがイスラエルをも捕らえます。そこで神は改めて独り子を小羊として十字架の上に送られ、もう一度過ぎ越しを用意され、愛を示されました。やがて、まさにこの過越の祭りの期間に、主の十字架が起こることになります。

　主よ、注がれている愛と憐れみに目を覚まさせてください。小羊イエスの贖いを記念し、愛に応えて愛を生きることができますように。

8月4日（金）　出エジプト記　第13章

…この日を覚えておきなさい。主は力強い手によって、あなたがたをここから導き出されたからである。(3)

エジプトの人も家畜もすべての男(あるいは雄)の初子を撃たれたことに対応して、イスラエルの人々にはそれらの初子を神に献げよと言われます。家畜の場合にはいけにえとしてで、人の場合には《神に贖われた、神のもの》として、ということです。

これらを通して告げられるのは、与えられているものがすべて神のものであることを私たちが忘れないためです。13 章で繰り返し言われるのは「(主の)力強い手」(3, 9, 14, 16) で、その神の力強い手に委ねることの方が、確かなのです。自分の手でどんなに力を込めて握りしめても、すぐに指の間から漏れてしまうと感じてしまうでしょう。今でも、教会では献児式をしますが、それは確かで力強い神の手に子どもを委ねることを明らかにするためです。

この出来事の記念は、本章でも「額に付けて」(9)とまで強調されます。種なしのパンは、出エジプト時にイーストで発酵させるまもなく急いでそこを出たことの記念です。主のもとに飛んで帰る信仰の象徴です。時間が立つと、そんなに大きな出来事も、日常の不平不満の中に埋もれてしまいます。だからこそ、繰り返し記念します。そしてその記念は、思い出を超え今ここにある恵みを見る目を開かせます。

主よ、力強く温かなあなたの御手を思い起こすことを祝福してください。

8月5日（土）　出エジプト記　第14章

主があなたがたのために戦われる。あなたがたは静かにしていなさい。（14）

民が逃げたという報告でファラオは、再びイスラエルの人々を追いかけます。「私のことも祝福してほしい」(12:32)と一見信仰的な発言をしたファラオでしたが、心の底から変わったわけではなく、実際には自分を取り巻く状況によって判断をコロコロと変えているばかりでした。しかしまた、状況に左右される点ではイスラエルの人々も同じです。「意気揚々と進んでいた」(8)彼らでしたが、エジプト軍の追跡を見た途端、ひどく恐れ、「エジプトに墓がないから、荒れ野で死なせるために私たちを連れ出したのですか」(11)と言い、放っておいてくれた方がましだったとまで言う始末です。

そこでモーセは、「主の救いを見なさい…あなたがたは今エジプト人を見ているが」(13)と彼らのまなざしを導きます。信仰者が状況に左右されないわけではありませんが、途方に暮れつつも主を見ることを知っている人々です。もし主を知らなければ、自分の手の内を数えて心を騒がせている他ないでしょう。モーセは「主があなたがたのために戦われる。あなたがたは静かにしていなさい」と導きます。静かにしていることです。なぜならば、主は生きておられ、私たちの力なさをよそにご自身の力をふるわれるからです。

主よ、途方に暮れる私を、主を信ずる静かさへと導いてください。

8月6日（日）　出エジプト記　第15章

主に向かって私は歌おう。
なんと偉大で、高くあられる方。
主は馬と乗り手を海に投げ込まれた。（1）

　イスラエルが静かにしている中で、主ただ一人が救いをなしてくださいました。その感謝と喜びが、「主に向かって歌おう」と言われます。信仰とは、頭の理解を超えて、その心まで捕らえられ、神を歌うようになることと言えるでしょう。荒れ野で歌う集団こそ神の民です。

　歌は、まず「主は私の力、私の盾。私の救いとなられた」と歌います。主が生きておられることを知った経験を喜びをもって歌います。生きている方に向かって歌うがゆえに、この賛美は6節以降、主なる神を「あなた」と呼びかけています。それを祈りと言ってよいでしょう。生ける神は、生けるがゆえに「あなた」と歌うことができる方です。

　しかし、「歌」(1)は荒れ野を三日進めば「不平」(24)に変わります。水が得られない渇きが不平となり、それはモーセへと向かいます。直接神に訴えないのは、生きておられる神を信じられなくなっているからでしょう。祈っても仕方がないと思うようになっているのでしょう。この民は、「掟と法」(25)によって育てられなければなりませんが、なかなか主への愛と信頼が育たず、難渋します。生ける神はそのたびごとに泉を与え、愛を示され、ご自身の民を育てられます。

　主よ、祈りの歌が不平に変わり果ててしまわないように、私を守ってください。

8月7日（月）　出エジプト記　第16章

あなたがたが不平を言ったのは、私たちに向かってではなく、主に向かってなのだ。（8）

再び不平が繰り返されます。水に対しての不平に続き、今度は食べ物がないという不平です。「あーあ、エジプトにいた頃はもっと…」と言うのは滑稽な感じもしますが、実際は荒れ野で食べ物がない中では、かなり深刻だったに違いありません。神の民は、まだその恐れと祈りが結び付けられないでいます。恐れを祈りへと結びつけてくださるのも神ご自身です。

民は祈っているつもりなどないままに、モーセとアロンに不平を述べます。それに対して、不平を述べるべき相手が違う、とモーセは言います。彼は自分にその責任を問われたところで、答えようもありません。すべてのことの主導者は主であるからです。主は、うずらとマナを与えて民を養ってくださることで、彼らを導き出した責任を果たされます。

信仰の民の危機は、導き手を見失うことで、しかも私たちは実にしばしばこの危機に立ち尽くし、不平不満の虜になります。けれども、ここに恵みがあります。祈りになり損ねた不平に、神は場を与えてくださいます。もちろん、不平は問題ですが、神が不平を問題になされば私たちはたちまち立場を失い、滅びるしかありません。主はそれをご存じなのです。

主よ、私たちのつぶやきや心の動きすらも、あなたに知られています。どうか、心の深くにまで信頼と感謝をお授けください。

8月8日（火）　出エジプト記　第17章

アロンとフルはモーセの手をそれぞれ両側から支えた。モーセの手は日が沈むまでしっかりと支えられていた。（12）

民は、またもや水のことでの不平をモーセに訴えます。水は必要不可欠ですから主が必ず与えてくださるはずです。ところが現状の乏しさのゆえに彼らは怖くなってしまったのでしょう。そこで本当にこの方に信頼していてよいのかと、主への疑いに陥ります。詩編 95 編にもマッサとメリバはふり返られ、不信仰な民が主の配慮の中でなお保たれると歌われます。

彼らの荒れ野の旅に生じたもう一つの困難は、そこに先にいた人々アマレクとの戦いでした。外敵の問題は、すでにエジプトの民との間で経験してきたものでしたが、荒れ野でもう一度、これに向き合うことになります。「神の杖」を手に取るというのは、ファラオと対峙した時と同じです。杖は神の力の象徴ですが、今回はすべてが神の力に担われたファラオとの対決とはやや異なって、それを掲げ続けるモーセの力が主体的に関与します。そして、そのモーセが疲れてきた時、今度はアロンとフルがそれを支えます。つまり、神の力は共同体の支え合いの中で表され、戦いは進められるという形を取るようになってゆきます。

神の民としての責任は、神の力を《支え合い、一つに結ばれること》によってこの地に表すことです。これは新しい神の民、教会も同じです。

主よ、支え合いつつ、結ばれつつ、神の国をこの地に表していることができますように。

8月9日（水）　出エジプト記　第18章

イスラエルに対して彼らが傲慢に振る舞ったときも、主はいかなる神よりも偉大であったと今こそ知りました。（11）

荒れ野にいたモーセのもとを、彼の妻の父エトロがモーセの妻とふたりの息子を連れて訪れます。エトロはアラビア半島北西部に位置するミデヤンの祭司ですから、初めから主への信仰があるわけではありません。けれども、主の憐れみに満ちた御業、すなわちファラオによって苦しめられたイスラエルに対する主の慈しみを見て「いかなる神よりも偉大であった」と言います。ある宗教で価値とされるものが、ほかからすると全く奇妙なものである場合があります。けれども、今日の箇所にはエトロもうなずく世界共通の価値が示されています。その価値とは《小さな者に注ぐ愛と憐れみ》です。

同時にエトロは、世俗の知恵として、多くの民の統治の仕方を教えます。モーセのもとには、民のもめ事の全部が集中し、やるべき事が追いつかない状況でした。エトロが教えられたとおり、モーセは律法の教えに集中し、資質のある人を千人、百人、五十人、十人ごとのリーダーに立てます。この場合の資質とは、有能であると同時に《神を畏れ、誠実で、不義を憎む》というものでした。そうでなければ、付与された権威を自分の利益のために使うことになるからです。誠実、正義は、一宗教を超えて世界に共通し、未だに通用する価値です。

主よ、偏狭な宗教的価値に陥ることから守り、世の人々と共に誠実に生きられますように。

8月10日（木）　出エジプト記　第19章

私がエジプト人にしたことと、あなたがたを鷲の翼の上に乗せ、私のもとに連れて来たことをあなたがたは見た。それゆえ…私の宝…（4，5）

律法がシナイ山において付与されようとしています。これをシナイ契約と呼びます。締結に先立ち、主はご自身の民との関係を「あなたがたを鷲の翼の上に乗せ、私のもとに連れて来た…私の声に聞き従い、私の契約を守るならば、あなたがたはあらゆる民にまさって私の宝」(4, 5)と言われ、その関係が愛の関係であることを思い起こさせておられます。契約ですからお互いに交わすもので、神は律法を指し示し、それに対して民はそれを受け入れ、守ると応えることが言われています。通常、私たちの契約は相互の利益に基づきますが、この場合やっかいなイスラエルは神の利益にはなりません。神の契約は愛に基づきます。それが愛である以上、神は紳士的に契約を提案し、イスラエルが自由に主体的に応える(1-8)という形になります。

契約が与えられるのに際して、「境、境界」(12, 23)が繰り返し確認されます。人間が律法の《善し悪し》を触(さわ)れないことを示します。例えば、人を殺す合理的な理由があっても、主は禁じられます。《人の尊厳》に合理的理由などありません。人がこれを乗り越えると、結局、人の存在を有用性ではかり続け、〈存在しなくてもよい人〉を作り出します。境界を越え、勝手に律法に触れる時に、殺伐たる社会が出現します。

主よ、理由付けし、愛を縮小してしまうことがなく、ひたすら愛に生きられますように。

8月11日（金）　出エジプト記　第20章

私は主、あなたの神、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。あなたには、私をおいてほかに神々があってはならない。(2, 3)

十戒が付与される、とても大切な章です。モーセ五書の中心と言ってもよいでしょう。

十の戒めは、①ほかに神があってはならない、②刻んだ像を造ってはならない、③主の名をみだりに唱えてはならない、④安息日を聖別せよ、⑤父と母を敬え、⑥殺すな、⑦姦淫するな、⑧盗むな、⑨偽証するな、⑩隣人のものを欲するな、です。

これを大きく二つに分けることができます。①から③までは、神に対してのものです。（④を前半に入れる説も有）④から⑩までは社会生活に関わる倫理です。これについて、主イエスも「『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』…『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる戒めはほかにない」と言われ、律法をこの二つとされました。それは言い換えれば、脇目も振らず神だけに注ぐ信仰などないとも言えます。宗教的な熱が、しばしば隣人を顧みず、どうかすると隣人を傷つけかねないことを、主は初めから知っておられるのです。隣人への愛を失えば、人を顧みない密かな殺し、姦淫、盗み、偽証、欲望を、表面上の正しさの奥に潜ませ得ます。ですから、改めて「これは愛か」と問わねばなりません。

主よ、愛に問われれば立ち尽くすしかない私です。ひたすら、愛のあなたを振り仰ぎます。

8月12日（土）　出エジプト記　第21章

目には目を、歯には歯を、手には手を、足には足を…(24)

前章の後半から、日常生活の、実に細やかな規則が書かれています。生活の場面一つひとつで、神の義を求めつつ裁いたことが分かります。

まず、祭壇を築くことの規定から始まり、本章の初めでは同族の奴隷についての規則になります。時代的な制約として奴隷制の可否そのものには触れられませんが、奴隷であっても家族を愛して幸せに暮らす権利を保障しています。

さらに、12 節からは人が死んだ場合に、故意か過失かを裁くこと、また傷を負わせた場合の補償を含めた対応が語られます。また、主人が奴隷を死なせた場合、その命の責任が問われます。奴隷などの身分の違いこそあれ、すべての命は主なる神に属すると考えられています。

22 節以降は、喧嘩によって思いがけず妊婦にぶつかるなどの被害を与えた場合について、また、喧嘩によって傷を負わせた場合の対応が「目には目を、歯には歯を」(24) と言われています。これは復讐の勧めではなく〈それ以上はするな〉という限界付けです。

28 節からは、家畜が人に被害を与えた場合についてです。飼い主の注意義務が履行されていたかが確認されます。

主よ、普段の生活の中で、神の義を求めつつ、隣人に対して誠実に生きることができますように。

8月13日（日）　出エジプト記　第22章

寄留者を虐待してはならない。抑圧してはならない。あなたがたもエジプトの地で寄留者だったからである。（20）

細やかな生活上の規則が続きます。読んでいて思うのは、神の民にトラブルがないわけではないことです。大切なのは、そのトラブルをどのように扱うかということです。

盗みについて、それが判明した場合には、二倍にして賠償せよと言われています(3，6，8)。つまり、賠償は単に負わされた不利益の穴埋めでは済まないということです。被害者が傷ついていて社会に対しての信頼を失っているからでしょう。ザアカイの不正な取り立ての四倍の弁済はそのよい例で、主の愛によって被害者の傷ついた心に気づいたからです(ルカ福音書第 19 章 1~)。加害側が相手の傷に深く気づくことによってこそ、被害者の癒やしは始まります。

もう一つ、特に強く響いているのは、弱者に対する規則です。寄留者を虐待してはならない、自分たちもかつてエジプトで寄留者として虐待されたからだと言われます。言語や顔立ちが異なる人々には、自分とは別の悲しみや苦しみがあるというわけではないのです。同じなのです。主はそれを思い起こさせようとなさいます。また、寡婦や孤児には彼らの大切さを主張する人々がいません。だからこそ、誰かがその大切さを主張しなくてはなりません。その先頭に立ち給うのは主ご自身です。

主よ、愛のこもったあなたの戒めに、私も愛を添えて応えることができますように。

8月14日（月）　出エジプト記　第23章

偽りの言葉から距離を置かなければならない。(7)

イスラエルに示される生活の規定が続きます。細々（こまごま）としているようでも、原理的なものは共通しています。「偽りの言葉から距離を置かなければならない」と言われるとおりで、言い換えれば《物差しを自分の中にではなく、外に持つこと》です。

「根も葉もない噂」(1)は、そもそも持っている「悪意」に引きずられる言葉で、真理を失っています。多数だからと言って真理があるわけでもありませんし、「ことさらに弱い者をかばう」のもいけません(3)。正しさは別に問われるべきだからです。敵意に任せて、相手の持ち物や援助の責任をないがしろにするな、と言われています。問われているのは字面の遵法（じゅんぽう）ではなく《愛》です。賄賂も人をゆがめます。立場の不安定な寄留者も正しく扱うべきです。

10 節からは休みの規定です。土地の休みも、人間の休みも、自分が休むためよりも、自分を取り巻く環境やほかの人々や奴隷などの使用人を休ませるためで、他者への愛のまなざしが求められているのです。

20 節からは、神の民に対する神の約束が改めて語られます。約束の地は一気には得られないと言われます。それだけに約束を信じていることが大切です。

主よ、自分の考える正義を、もう一度あなたの前に問うことができますように。

8月15日（火）　出エジプト記　第24章

民は皆声を一つにして、「主が語られた言葉をすべて行います」と答えた。(3)

告げられた契約に対して、改めてこれを受け入れるかどうかが問われます。第 19 章では、顕現なさる神の前に設けられた境界をモーセただ一人が越えていくことができましたが、今回はモーセに加え、アロン、ナダブとアビフ、それに七十人の長老が呼び寄せられています。そのようにして、すでに告げられた律法の言葉が読み聞かせられ、民は「主が語られた言葉をすべて行います」と答えます。契約締結の儀式が行われ、モーセは律法が記された石の板を受け取るために、改めてシナイ山に登り、四十日四十夜そこに留まることになります。

先回りして結論を言えば、このモーセ不在の四十日四十夜は民には長過ぎ、32 章で彼らは神に捨てられたと思い込み、金の子牛を造って拝み始めます。「主が語られた言葉をすべて《行います》」(19:8) を反故にします。これは荒れ野の一世代目だけではありません。旧約の歴史の中で、《行うこと》に基づいた神との契約に人が応え得ないことが次第に明らかになってきます。神が想定外の人間の頑迷さに出遭われたと言えます。やがて、神は、赦しと愛の契約を新しく提示なさいます。愛に基づいてこそ、心から律法を行うスタートラインに立つことができるのです。

主よ、契約を更新して救おうとなさるあなたの愛に深く気づいていられますように。

8月16日（水）　出エジプト記　第25章

証しの箱の上にある二つのケルビムの間から、イスラエルの人々のために命じるすべてのことをあなたに語る。(22)

出エジプト記は本章から 40 章まで、おもに幕屋に関わる記述が続きます。10 節以降、まず初めに語られるのは、幕屋の中心部分についてです。「箱」と語られるのは「主の契約の箱」（申 10:8）のことで、「主の箱」とも呼ばれます。その中には、主がお与えくださる律法を刻んだ石の板が入れられます。その上の部分が「贖いの座」と呼ばれるものです。箱の両端に向かい合うように取り付けられたケルビムの間から主は語ると約束されました(22)。また幕屋のパンを置く台と燭台を造るように指示されます。燭台をアーモンドの花を模したものにするのは、原語の「見張り、目覚めている者」と音が似ているためで、主がいつも見張っていてくださることを思い起こすためです。

イスラエルの旅の間、この幕屋が主との出会いの場として彼らを支えます。幕屋は定住の後、荘厳な神殿になりますが、それも他国に破壊されます。新約のヘブライ人への手紙では、荘厳な神殿よりもその前身の幕屋が思い起こされます。荘厳さよりも、どんな旅路にも《神が共におられること》を見いだす方が大切でした。愚かと言うほかない歴史をたどりつつも、神の臨在はその民とずっと共にありました。

主よ、今日も私に言葉を語りかけ、伴われる方を信じ歩むことができますように。

8月17日（木）　出エジプト記　第26章

その垂れ幕はあなたがたにとって聖所と至聖所とを分けるものである。（33）

前章の箱を置くための幕屋とそれを囲む壁についての詳細な規定が告げられています。文章では読み取りにくいのですが、中心にカラフルな「意匠を凝らした（美しくデザインされた）」幕で覆う幕屋があって、それを囲むようにアカシヤ材の壁板が設けられました。壁板は、東西約 45 メートル、南北約 22 メートルに渡って張り巡らされ、その中に聖所と至聖所を擁する東西約 13.5 メートル、南北約 5.5 メートルの幕屋が設けられるという格好になります（インターネットで調べると、いろいろな画像を見ることができます）。

31 節からは、聖所と至聖所を隔てる垂れ幕について告げられます。この垂れ幕が設けられたのは、中枢の契約の箱が置かれる至聖所に、たとえ祭司であっても不用意に入ることがないためです。それは、聖なる神のきよさを示すと同時に、そのきよさから人間がどれほど離れた罪深い存在かを示すようになりました。神と人間の間にある障壁の象徴となったのです。

この垂れ幕について、ヘブライ人への手紙は「イエスは、垂れ幕、つまり、ご自分の肉を通って、新しい生ける道を私たちのために開いてくださったのです」（10：20）と告げます。隔てられざるを得ない人間の罪を、主イエスの十字架が取り除き、神に近づく道が与えられました。

主よ、あなたに近づけられる、大きな大きな恵みに、心から感謝いたします。

8月18日（金）　出エジプト記　第27章

夕暮れから夜明けまで、その灯を主の前に整えなければならない。（21）

本章で言われる祭壇は、焼き尽くすいけにえを献げるために幕屋の前に置かれるものです。

続いて、幕屋の庭についての指示です。長辺の長さ百アンマは、一アンマが約 45 センチですから、45 メートルになり、掛け幕で覆われ飾られます。神との交わりのために設けられた特別な場所を意味します。こうして他とはひときわ異なる空間に入り礼拝を献げることによってイスラエルは神の民として存在します。今の私たちの礼拝と言ってもよいでしょう。普段の時とはひときわ違う時と場所に立つことは、私たちを神の民として生かします。

さらに、20 節からは、灯を純粋なオリーブ油で絶やさず燃やしているように言われます。特に夜の時間に灯を整えよと言われています(21)。これは、25：31 以下で言われていた、アーモンドの花を模して神の見張りを象徴する燭台の灯し方についての指示です。したがって、特に闇が深いときにこそ、主がイスラエルのために《見張って》くださっていることを、主の前にその灯を絶やさぬように整えて思い起こすのです。「夜は更け、昼が近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けましょう。」（ローマ 13:12）

主よ、私も礼拝と祈りによって、あなたの民とされた幸いを思い起こし続けます。

8月19日（土）　出エジプト記　第28章

兄アロンのために、栄光と美しさを表す祭服を作りなさい。(2)

本章では、祭司についての規定が語られています。祭司として立てられるのは、アロンとその子たちです。ここでは、特に祭司がその務めをなすときの祭服について語られています。たとえば、エフォドについて、ベスト(チョッキ)のようなものや、腰に巻いたものなどが考えられています。詳細に語られてはいるものの、それがどういうものであったかははっきりしないところが残ります。

こんなに詳細な祭司とその服装に至るまでの記述の意図は、ご自分に出会うためのふさわしい装いを神がお求めになっていることです。祭司の基本的な務めは、神と人との仲立ちとして御前に立つことです。けれどもいくら祭司といえども、人間である以上、人間の側にいるのであって、真実の意味で仲立ちとはなり得ません。「栄光と美しさ」を表すための意匠を凝らした装いが求められていますが、しかしそれで御前に立つのに間に合うのでしょうか。

パウロは、「主イエス・キリストを着なさい」(ローマ 13:14)と言います。神の栄光を映す美しい装いは、神がお与えくださるものです。しかも、この装いは生きていて、私たちから闇のわざを追い出してしまいます。

主よ、御子があなたに近づくための装いを与えてくださったことを感謝いたします。確信をもって御前に近づきます。

8月20日（日）　出エジプト記　第29章

私はその場所であなたがたと出会い、あなたと語る。私はそこでイスラエルの人々と出会う。彼らは私の栄光によって聖別される。（42，43）

祭司の任職の儀式についてです。幕屋での祭儀の中で、最も神聖で重要な儀式です。祭司は神に近づくがゆえに権威を持ち得ますが、それを決して自分のために用いてはなりません。それだけに、この祭司の任職の儀式は厳格に決められています。幕屋の入り口で沐浴し、正装を整え、きよめの犠牲として雄牛を献げ、全焼のいけにえとしての羊、また祭司を清めて一部は祭司の食物に供される羊を献げます。しかもこの儀式を七日間にわたって行うというのですから、祭司職の権威を勝手気ままに扱うことが決して許されないことが、アロンをはじめとするその職に任じられる人々に打ち込まれます。

38 節以降は、そのようにして任じられた祭司が幕屋で日ごとに行うことについての記述です。日ごとに朝夕、一頭ずつ小羊をパンやオリーブ油と共に燃やして献げられます。神の愛に応える証しです。「私はその場所であなたがたと出会い、あなたと語る」(42)と言われています。幕屋での祭儀は後の神殿に引き継がれ、神殿での祭司は、主の愛に応えて言葉を紡ぎました。多くの詩編が、こうした神殿にいた霊性豊かな祭司たちによって詠まれたものだと考えられています。

主よ、いつも主との出会いの道を備え、あなたの愛に応える歌を与えてくださることを感謝いたします。

登録にあたり、彼らはそれぞれ命の贖い金を主に納めなければならない。登録することで彼らに災いが起きないためである。（12）

イスラエルの礼拝についての規定が告げられていますが、本章では、香を焚くための祭壇、人口調査、洗盤、香についての語られています。

礼拝の規定の中に、人口調査が語られているのは一見関連がないように思われますが、これは礼拝の民についての規定と考えてよいでしょう。礼拝の一つの要素は、そこに集う礼拝の民ですが、その民を迎える祭司も、そこに集う民自身も、自分たちがほかの誰のものでもなく、神のものであることを知る必要がありました。「命の贖い金」はそれを知るためです。

人口調査は災い(12)の危険を伴いました。例えば、ダビデが晩年に行った人口調査は、重い罪、愚かなこととして扱われ、彼自身懺悔しています(サム下 24:1-15)。問題は神から自分に託された民を、まるで自分のもののように考え、自分の功績として数えてしまうことです。礼拝の務めをする祭司にも同じ危険がありました。だからこそ、一人ひとりが主のための贖い金を献納物として納めることで、礼拝する民一人ひとりが《神のもの》であることを確かめました。

祭壇と祭司に注ぐ油を専門の香料作りに調合させました。そして同じものの調合は禁じられ、幕屋での礼拝はそこにしかない豊かな香りに満たされました。天からの香りの象徴です。

主よ、天の香りを嗅ぐことが許される礼拝の民とされている幸いを感謝いたします。

8月22日（火）　出エジプト記　第31章

私はユダの部族のフルの子ウリの子ベツァルエルを指名し、彼を神の霊で満たし、知恵と英知と知識とあらゆる巧みな技を授けた。（2，3）

主が、幕屋、祭具、祭服のためにベツァルエルという人物について「彼を神の霊で満たし、知恵と英知と知識とあらゆる巧みな技を授けた」と言われます。神の栄光を担うのに、神は人をお求めなのです。いずれにしても限界ある人間の業が、それでも神の栄光を担うことができるということがわかります。教会は、音楽や絵画をとおして、神に仕えてきました。人間が神を信じ祈りつつ注ぐ業を、神がご自身の栄光を現すために用いてくださるからです。

12 節からの安息日については「私とあなたがたの間の代々にわたるしるし」と、つまり神と人の結び目だと言われています。十戒においても、第 4 戒の安息日については神に対する戒め（第 1 戒－第 3 戒）と人に対する戒め（第 4 第－第 10 戒をつなぐ形になっています。この位置関係からも、神と人をつなぐのが安息日であることが分かります。安息日は、仕事をしない休日で、人間が仕事のために生きているのではないことを知る日です。仕事から解き放たれれば、私たちは本当にしたいことをします。そこに私たちが人生の主たる目的を何と考えているかが現れます。信仰者は人間の主たる目的は、神と共にあることだと信じます。これこそ、生と死においてなお私たちを慰めうる慰めです。

主よ、私たちが頂いているものを御前にささげ、あなたを礼拝します。

8月23日（水）　出エジプト記　第32章

主はモーセに言われた。「私はこの民を見た。なんとかたくなな民だろう。」（9）

戒めが主からモーセを通じて宝の民に授けられたにもかかわらず、民はと言えば、シナイ山の麓で金の子牛を崇める偶像礼拝に興じていました。下山したモーセは神の作、神の文字で書かれた律法を、民に伝えるはずでしたが、それは 35 章まで先送りになってしまいます。

「導き上った人、あのモーセがどうなったのか」(2) という言葉は、彼らの目が指導者ばかりに注がれて、本当に自分を導く方を見失っていることを物語っています。モーセはこの荒れ野の旅の終わりに約束の地に入ることなくこの世を去り、指導者はヨシュアに引き継がれます。目に見える指導者は、肉眼にありありと見えているようでも限界のある人間です。本当に導く方であられる不変の永遠者にこそ、目を注がなくてはなりません。

偶像礼拝に陥る民は「頑なな民」と言われています。神は妬むほどの愛をもってイスラエルをお求めでした。けれども、ご自身のこの上ない愛によっても心を変えることがない民の姿に、神は激しくお怒りになります。神が愛の傷をお受けになったと言ってもよいでしょう。やがてこの愛の傷は、十字架の主イエスの上に現れます。ご自身が深く悲しむほどのまっすぐな愛を、私たちは受けているのです。

主よ、あなたの真実な愛に対して鈍くなり果ててしまうことがありませんように。

8月24日（木）　出エジプト記　第33章

あなたは私の顔を見ることはできない。人は私を見て、なお生きていることはできないからである。（20）

先の金の子牛の一件で、神が「あなたの間にいて一緒に上ることはない」と不在を告げられることで、民は狼狽します。民にしてみれば意図的に神を拒絶したのではなく、不安ゆえに〈共にいる何か〉を求めた思いです。人間は祈りの心を持ちますが、しかしその祈りが祈りを聞き給う方に向いているかは、改めて問わねばなりません。

主が共におられること《臨在》は、本来、厳粛なものだと、本章は示します。モーセの執り成しによって、主は共に歩み給うことを約束してくださいますが、しかし「私の顔を見ることはできない」と主が言われます。共におられる方の顔を見ることは、太陽に近づけば焼け尽くされてしまうように、人間がもはや生きていられなくなるほどのことなのです。

モーセはそれでもイスラエルと共におられる方を経験します。それは岩の裂け目に隠され、主の手に覆われてやっと経験できるものです。十字架の主の御姿は、罪ある私たちが主の前に立ったときの姿です。この十字架によって神の処罰は終わり、私たちは親しく神と共にあることができるようになりました。計り知れないインマヌエルの恵みを感謝しましょう。

主よ、主が共におられるという大きな恵みを、主よ、その大きさのままに受けとめさせてください。

8月25日（金）　出エジプト記　第34章

主、主、憐れみ深く、恵みに満ちた神。/怒るに遅く、慈しみとまことに富み/幾千代にわたって慈しみを守り/過ちと背きと罪とを赦す方。（6）

偶像礼拝に陥ったイスラエルに、モーセを通して神はもう一度、律法をお与えになります。その時に、ご自身の名によって「主、主、憐れみ深く、恵みに満ちた神。／怒るに遅く、慈しみとまことに富み／幾千代にわたって慈しみを守り／過ちと背きと罪とを赦す方」と宣言されます。このあとには罪の罰については「三代、四代」であることに比べれば慈しみは幾千代と言われ、圧倒的に慈しみ・まこと・赦しに傾斜していることがわかります。恵みを注ぎに注いで、ご自身の愛の中に取り戻し給うのが、イスラエルに約束された神の愛です。

モーセの答えも「かたくなな民ですが、私たちの過ちと罪とを赦し、私たちをご自身のものとしてください」(9) と、民の頑なさを打ち砕く神の愛を信じています。「神のもの」とされるのは、イスラエルが成ろうとして成るものではなく、神がそうしてくださるほかないものだ、とモーセは言います。何か心が動かされます。

そこで、「主はその名を妬みと言い、妬む神だ」(14) とイスラエルをどこまでも捕らえようとする主の愛が語られます。このこの主の愛は、やがて主イエスの十字架となります。主は愛以外でイスラエルに向き合う方法をご存じないのです。

主よ、イスラエルに表されたその愛は私にまで届きました。感謝です。

8月26日（土）　出エジプト記　第35章

心を動かされた人と、魂を突き動かされた人は皆、会見の幕屋の製作と、そのすべての作業や祭服のために、主への献納物を携えて来た。(21)

本章4節から幕屋の建設が着手されます。まず、幕屋とそれに関連するもの、祭具、祭服、などを作るための献げ物を集める指示が出されます。

この指示は、イスラエルの人々の心に届きました。「心を動かされた人と、魂を突き動かされた人は皆、会見の幕屋の製作と、そのすべての作業や祭服のために、主への献納物を携えて来た」と言われているとおりです。さらに、「心から進んで」(22)、「心に知恵のある…」(25)、「心を動かされ」(26)、「心から進んで」(29)とあるように、彼らの心が深く動き、一つに結ばれて、幕屋とそれに関連するものが、一気に用意されて行く様子が伝わってきます。

心からの献げ物は、イスラエルの人々の心が神につながれていることの証しです。自分が《神のもの》であることを心深くで知っているのです。献金の祈りで「頂いているものの中からお返しします」という祈りをよく聞きます。神のものの中を自分が生かされていることを知った心の祈りです。パウロは、献身が《理に適った》ものだと言います。万物の創造者、支配者であられる方に、お返しし、生きることは、最も理に適ったことなのです。

主よ、心と魂が突き動かされるほど、あなたのものとされている幸いに捕らえられ、生きることができますように。

8月27日（日）　出エジプト記　第36章

仕事をする者のうち、心に知恵のある者たちは皆、幕屋を十枚の幕で造った。（8）

幕屋、壁板、垂れ幕について 26 章で主から伝えられていたとおり、本章で作られていきます。しかも 26 章と同じことが繰り返し書かれていますが、こちらには「心に知恵のある者たち」が受けとめたという言葉が加えられています。26 章で「意匠を凝らして」と言われていたことを受けとめる人々がいたのです。

改めて、「心に知恵のある」という言葉に惹かれます。もちろん、神の指示はそのままに受けとめるのですが、その指示の中に「意匠を凝らせ」と言われていることで、人間が神の慈しみに感動し、それを表現する場が与えられているのです。人間の心が躍動し、大胆に自由に表現することを、神は求めておられるのです。幕屋の祭儀は、喜びに基づく健やかな緊張によって支えられました。

読んでいると、この壮麗な幕屋を映像で見てみたくもなりますが、叶わないこともまた意義あることでしょう。なぜならば、初めの幕屋を再現することが大事なのではないからです。時代ごとに、心に知恵のある人々が、意匠を凝らして神の民とされていることの喜びを表現することをこそ、神はお求めなのです。

主よ、私の知恵をあなたの恵みが占領し、喜びを豊かに表現させてくださいますように。

8月28日（月）　出エジプト記　第37章

ベツァルエルはアカシヤ材で箱を作った。（1）

前章同様、本章も予め示されていた主の指示を繰り返し、そのとおりに契約の箱、贖いの座、台、燭台を作ったということが言われています。同じことの繰り返しのようでもあるのですが、いくつか違う点があります。

まず、幕屋について 25 章～ 26 章で予め言われたときは、契約の箱などの幕屋の中身が先に、それを覆う幕屋が後にという順序で書かれます。それがこの 36 章～ 37 章での建設の時には逆転し、幕屋自体が先に、そしてその中身は後の順で書かれます。逆転の理由は、実際の施工時には中身よりも先にその入れ物を先に準備しておかなければならないという現実的な順序でしょう。私たちの日常においても、何かの実行段階で順序が入れ替わることもあるでしょう。けれども、その時にも何を目指しているかは、いつも心深くに宿し続けていたいものです。

予め示されていた 25 章と本章 37 章の違いのもう一つは、ベツァルエルという契約の箱を作った人物の名前が記されていることです。彼が立てられたのは神の指名でした。神がご自身の慈しみをお示しになるのに、ある人物とその業とをお求めになりました。

主よ、私の名もまた覚えられ、私がすることをあなたが喜んで求めておられることを、心から感謝いたします。

8月29日（火）　出エジプト記　第38章

聖所のすべての仕事のために用いられた金の総量、つまり、奉納物の金は聖所のシェケルで、二十九キカル七百三十シェケルとなった。（24）

引き続き予めの指示通り幕屋とそれに関するものが作られていく様子が、記載されていきます。ここでは、27 章で命じられた祭壇、洗盤、庭が、そのとおりに作られていく様子が書かれます。その記述の仕方は 27 章 1 節で「アカシヤ材で祭壇を造りなさい。祭壇は長さ五アンマ、幅五アンマの正方形で、高さは三アンマである」と書かれていたことに対して 38 章 1 節では「また、アカシヤ材で焼き尽くすいけにえの祭壇を造った。祭壇は長さ五アンマ、幅五アンマの正方形で、高さは三アンマであった」と、命じられた言葉の通り作ったことが、こうした書き方で言い表されています。

21 節からは、その工事の記録についてです。祭司イタマルの指導とレビ人の奉仕、オホリアブのデザインを職人ベツァルエルが実際の形にしました。こうして名前が記される人のみならず、「六十三万三千五百五十人」が献げ物を献げて協力しました。「聖所のシェケル」がはっきりせず換算も概算になりますが、ざっと現代の値に直せば、金約 1 トン、銀は 3.5 トンが献げられました。それぞれが献げたものが、結びつき、一つの形になりました。民の喜びの様子がよく分かります。

主よ、自分であなたの言葉を書き換えず、そのとおりに生きることができますように。

8月30日（水）　出エジプト記　第39章

モーセがすべての仕事を見ると、主が命じられたとおりに彼らが行っていたので、モーセは彼らを祝福した。（43）

祭服も 28 章で言われていたことが、ほとんどそのまま繰り返され、そのとおりに作られてゆきます。この章で特徴的なのは「主がモーセに命じられたとおりであった」という言葉が繰り返されることです(5，7，21，26，29，31)。この言葉はこれまでの幕屋とその中の箱や贖いの座などの工作については、記されていませんでした。祭服についてこう付け加えられるのは、大きな工作物よりも、衣服の方が細かな部分において型から外れてしまうことが起こりやすいためと考えられます。

32 節以降、幕屋の完成が書かれます。ここでは、「すべて主がモーセに命じられたとおりに行った」と言い極められ、できあがったものをモーセに見せ、モーセは主が命じられたとおりのものであることを認めます。そして、イスラエルの人々を祝福します。

何をよいものと考えるかは、人それぞれですが、幕屋は神がお求めのものですから、神に応答して建てるべきものです。教会は幕屋そのものではありませんが、神の言葉に応答してつくられることが求められる点では同じです。使徒パウロも「管理者に求められるのは、忠実であること」（Ｉコリ 4:2)と言ました。

主よ、あなたの言葉の中にこそ喜びがあると信じ、御言葉の中を歩ませてください。

8月31日（木）　出エジプト記　第40章

旅路にある間、昼は主の雲が幕屋の上にあり、夜は雲の中に火があるのを、イスラエルの家は皆、目にしていたからである。（38）

出エジプトから一年後、幕屋の準備が整い、いよいよ作られたものが組み上げられます。それを行うのは、モーセ自身だったと書かれてあります(18)。もちろん、重いものもありますから、ほかの人々も協力したのでしょうけれども、モーセその人が建てたと記されています。

そうして、28 節では幕屋の入り口に設置された祭壇で、初の焼き尽くすいけにえが、これもモーセによって献げられます。アロンが祭司に就任するのは、このあとレビ記 8 章においてです。この意味は、この時点で神と民をつなぐのはモーセただ一人だということで、十戒を授かったのも、彼ただ一人だったことと符合します。そうすると、十戒を授かったのも、幕屋を建てたのも、そこで犠牲を献げたの、全部モーセです。ところがその仕事を終えたモーセは、主の栄光が幕屋に満ちてその中に入れなくなります。彼が作った幕屋でも《神のもの》なのです。

人間が注ぐ業があります。けれども、主に注いだ時点で、それは神のものとなり、その人のものではなくなります。そうして、そこに表された臨在が、イスラエルもそしてモーセ自身をも導くようになります。イスラエルを導くのは、疲れ眠り休む人間ではなく、眠ることもまどろむこともない神なのです。

主よ、私の奉仕はあなたに献げたものです。あなたが自由にお用いくださると信じます。